

22名のアーティストによるチャリティオークション
「Place in my heart」展
能登半島地震への支援を目的に、11月8日(金)から開催



ポーラ ミュージアム アネックス(東京・中央区銀座)では、チャリティオークション「Place in my heart」展を2024年11月8日(金)から12月1日(日)まで開催します。

本チャリティオークションは、2020年のコロナ渦中、医療従事者の方々に対して私たちが「今できること」とを考え、スタートしました。以降、テーマと支援先を、各年の社会情勢や心境を反映する形で開催し、今年で5回目を迎えます。毎年楽しみにして下さるお客さまとの輪も広がり、おかげさまで延べ2,609名にご参加いただき、総額67,446,415円をNGO等の団体へ寄付することができました。

今年は1月1日に能登半島地震が発生し水害も重なるなど、今なお復興への手が必要とされています。元旦のあの日、震災にあった地を憂い、天災の頻発を受けて家族や故郷を想う気持ちを、誰もが持ったのではないのでしょうか。そこで今年は「ふるさと、故郷、HOME」をテーマに「Place in my heart」展と題し、開催することと致しました。

本展では、賛同いただいた22名のアーティストが各1点、テーマをもとにオリジナル作品を制作します。作品は、展示会場でご覧いただけるとともに、サイレントオークション形式*でオンラインにてご入札いただけます。またドロワーイング作品の抽選販売も行います。オークション作品およびドロワーイングの販売収益全額は、日本赤十字社「令和6年能登半島地震災害義援金」へ寄付予定です。(入札サイトは11月11日にオープン予定)

各アーティストの表現する多様な「ふるさと、故郷、HOME」は、わたしたちの心の中にある拠り所とは何か、問いかけてくるようです。ぜひこの機会に足をお運びください。

*サイレントオークションとは、競りは行わず入札のみ行い、期間中に最高額をつけた方が落札者となる形式です。

|| 出展作家 ||

イイノナホ、今井昌代、岩田俊彦、柏原由佳、鬼頭健吾、鈴木ヒラク、竹村京、舘鼻則孝、津上みゆき、中村弘峰、中村萌、流麻二果、西島雄志、野口哲哉、ヒグチユウコ、福井利佐、増田セバスチャン、水野里奈、ミヤケマイ、横溝美由紀、Ryu Itadani、渡辺おさむ(五十音順)

|| 展覧会概要 ||

展覧会名：チャリティオークション「Place in my heart」展

会期：2024年11月8日(金) - 12月1日(日) [24日間] ※会期中無休

開館時間：11:00~19:00(入場は18:30まで) 入場無料

会場：ポーラ ミュージアム アネックス (〒104-0061 中央区銀座1-7-7 ポーラ銀座ビル3階)

アクセス：東京メトロ 銀座一丁目駅 7番出口すぐ / 東京メトロ 銀座駅 A9番出口から徒歩6分

主催：株式会社ポーラ・オルビスホールディングス

URL：<https://www.po-holdings.co.jp/m-annex/>

オークション入札およびドロワーイング抽選サイトの公開期間：11月11日(月) 11:00~12月1日(日) 23:59まで

※状況により変更になる場合がございます。ギャラリーHPで最新の情報をご確認の上、ご来館いただけますようお願い申し上げます。

作品左から：野口哲哉「RING AND MAN」2024年 ミクストメディア / 中村萌「sprouts of spring」2022年 楠、油彩 / ヒグチユウコ「はる」2022年 手漉き和紙、水彩、ペン / 水野里奈「暖かな晴天の日」2022年 油彩、キャンバス(すべて部分)

【リリースに関するお問い合わせ】 株式会社ポーラ・オルビスホールディングス コーポレートコミュニケーション室
info-annex@po-holdings.co.jp TEL 03-3563-5540 / FAX 03-3563-5543
【読者からのお問い合わせ先】 ポーラ ミュージアム アネックス TEL 050-5541-8600 (ハローダイヤル)

|| 作家プロフィール ||

※掲載作品は一部を除き、過去の参考作品です。本展では各作家の新作を展示予定です。

イイノナホ Naho Iino

1967年 北海道洞爺湖温泉町生まれ、東京四谷育ち。

武蔵野美術大学彫刻学科卒業後、シアトルのビルチャックグラススクールで学ぶ。

時間をテーマにした独創的なオブジェを中心にランプやシャンデリアなど灯を使った造形作品を手がけるアーティスト。国内外の住宅や店舗、美術館向けのシャンデリアなども手がける。作品は全て自身による手吹き、または鋳造により制作され、ガラスの繊細さと手作業による温かみを備える。

<https://www.naho-glass.com/>



「新宿百景」2024年 ガラス

今井昌代 Masayo Imai

テディベア・ぬいぐるみ作家。

1999年より制作を始め、球体関節のあるテディベアや布形状フェルトを使ったぬいぐるみを発表。絵本『ギュスターヴくん』白泉社 にぬいぐるみ制作で参加。著書に『カカオカー・レーシング』グラフィック社、『Teddy Bear Works Imai Masayo』ポリス文庫。

<https://www.instagram.com/uritouran>



「Kissing under the mistletoe」2020年
ウール素材、化繊綿、ハードボードジョイント他
焼き物目玉(絵付け協力：ヒグチユウコ)

岩田俊彦 Toshihiko Iwata

1970年 神奈川県生まれ。1999年 東京芸術大学美術学部工芸科漆芸専攻卒業。

漆芸の伝統的な技巧を用いつつ、現代の感性に溶け込む作品を既成概念にとらわれない表現で制作。幾何学的な線や模様、動植物や家紋などのモチーフを描いたフラットパネルシリーズ、漆という素材と対話をしながら完成へと導かれるダイアログシリーズなどの作品を手掛けている。2023年から2024年にフォーシーズンズホテル大阪における大型平面作品の制作、主な展覧会に「MICA2022」(2022年 ギャラリーエクリュの森)、「U HOPE」(2021年 コートヤード HIROO)、「Authentic Aesthetic」(2020年 伊勢半本店紅ミュージアム)、「THIS IS NOW」(2020年 ANA インターコンチネンタルホテル東京) などがある。

https://www.instagram.com/iwata_toshihiko



Dialogue series 「square plate」
2024年 漆、木材、他

柏原由佳 Yuka Kashihara

1980年広島県生まれ。武蔵野美術大学で日本画を学んだ後、2006年渡独。

2013年ライブツィヒ視覚芸術アカデミー修士課程卒業、2015年同アカデミーマイスターシューラー号取得。2022年日本帰国、東京にて制作。日本画のように薄く溶いた油絵の具と、テンペラ絵具、アクリル絵具を用いた深い色彩により、透明性と濃密さが共存した生命力溢れる作品世界をつくりあげている。2012年にVOCA展に出展、佳作賞と大原美術館賞を受賞。主な個展に「最初の島 再後の山」(2016年 大原美術館)、「Polar Green」(2019年 小山登美夫ギャラリー)、「1:1」(2021年 ポーラ ミュージアム アネックス)「YukaKashihara」(2022年 アクアベラギャラリー、アメリカ、パームビーチ)、「Pile of Signs - しるし、徴」(2024年、小山登美夫ギャラリー 前橋) など。

<http://tomiokoyamagallery.com/artists/yuka-kashihara/>



「とある」
2022年 油彩、アクリル、キャンバス

鬼頭健吾 Kengo Kito

1977年愛知県生まれ。京都芸術大学大学院教授。2001年名古屋芸術大学絵画科洋画コース卒業後、2003年京都市立芸術大学大学院美術研究科油画修了。主なグループ展に「六本木クロッシング 2007: 未来への脈動」(2007年 森美術館)、「アーティスト・ファイル」(2011年 国立新美術館)、「Mono No Aware」(2013年 エルミタージュ美術館)、「ギホウのヒミツ」(2019年 高松市美術館)、「色と感情」(2022年 ポーラ ミュージアム アネックス) など。主な個展に「Multiple Star I, II, III」(2017年 原美術館 ARC)、「Full Lightness」(2020年 京都市京セラ美術館)、「Reconnecting」(2021年 Japan House LA)、2023年には「Unity on the Hudson」(2023年 Hudson River Museum, NY) など。2008年に五島記念文化賞を受賞。ニューヨークに1年滞在し、その後ドイツ・ベルリンにて制作活動。フラフープやパラソルなど、工業製品を空間に充滿させることにより作品化したり、近年は布や鏡などを建物の構造や自然および人工の光といった環境に接続、干渉する作品を発表している。ありふれた日常のもので現代社会を軽やかに批評する作家として国内外から高い評価を受ける。

<https://mtkcontemporaryart.com/artist/kito-kengo/>



「cartwheel galaxy」
2022年 acrylic, glitter, glass,
spray on canvas

鈴木ヒラク Hiraku Suzuki

1978年生まれ。東京芸術大学大学院修了後、シドニー、サンパウロ、ロンドン、ニューヨーク、ベルリンなどの各地で滞在制作を行う。「描く」と「書く」の間を主題に、平面・彫刻・映像・インスタレーション・パフォーマンスなど様々な制作活動を展開し、ドローイングの拡張性を探求している。主な個展に『今日の発掘』群馬県立近代美術館(群馬、2023年)がある他、これまでに金沢21世紀美術館(石川、2009年)、森美術館(東京、2010年)、銀川現代美術館(中国、2016年)、MOCO Panacée(フランス、2019年)、東京都現代美術館(東京、2019-2020年)など国内外の美術館で多数の展覧会に参加。音楽家や詩人らとのコラボレーションやパブリックアートも数多く手がける。作品集に『SILVER MARKER—Drawing as Excavating』(HeHe、2020年)など、著書に『ドローイング 点・線・面からチューブへ』(左右社、2023年)がある。現在、東京芸術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス准教授、ヴロツワフ美術大学(ポーランド)客員教授。

<http://hirakusuzuki.com/>



「Untitled (Lights) #25」
2024年 シルバーインク、青墨、竹和紙

竹村京 Kei Takemura

1975年東京生まれ、東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。同大学大学院美術研究科修了後、ドイツ・ベルリンでの留学を経て滞在。現在は高崎で制作活動を行なっている。竹村は主に写真やドローイングの上に絹糸の刺繍を施した布を重ねたインスタレーションを発表している。この刺繍による行為は、竹村が「仮に・・・」という状態を生み出すことの試みであり、竹村がかつて家族で暮らした家、親しい間柄にある人につながる記憶や時間、失われたものを具体的な存在として再構築する作業でもある。また壊れた食器や日用品を用いた「修復シリーズ」の制作でも知られている。主な展覧会に「Before/After」(2023年 広島市現代美術館)、「ホームスイートホーム」(2023年 国立国際美術館)、「Floating on the River」(2023年 京都近代美術館)、「ヨコハマトリエンナーレ 2020」(2020年 横浜美術館)がある。

<https://www.takaishiigallery.com/jp/archives/4171/>



「修復された C.M.の1916年の睡蓮」
2023-2024年 糸糸、絹オーガンジー紙

館鼻則孝 Noritaka Tatehana

1985年東京都生まれ。東京芸術大学で染織を専攻。レディー・ガガの履くヒールレスシューズの作者として知られる。過去の日本文化を見直し、現代的に再定義することで制作される作品は、独自の視点と世界観を持つ。近年は絵画も制作し、伝統工芸士との創作活動にも精力的に取り組む。メトロポリタン美術館(ニューヨーク・アメリカ)や、ヴィクトリア&アルバート博物館(ロンドン・イギリス)に作品が永久収蔵されている。

<https://www.noritakatatehana.com>



「Baby Heel-less Shoes」2021年
牛革、豚革、染料、クリスタルガラス、金属ファスナー

津上みゆき Miyuki Tsugami

1973年東京生まれ大阪に育つ。京都芸術大学大学院修了。作品タイトルに冠している“View”は「みえるもの」「眺め」と「みること」「見方」の両義を示す。人がどのように外の世界を自分の世界として捉え、自身の視点から尺度や価値観を構築していくのか、観察し描く日々のスケッチを通して現代における風景画の制作に取り組んでいる事に由来する。主な個展：2005年大原美術館（岡山）、2013年一宮市三岸節子記念美術館（愛知）、2015年ドミニカナー・クロスター・プレントラウ（ドイツ）、2018年上野の森美術館ギャラリー（東京）、2019年長崎県美術館。このほか台北市立美術館（台湾）、アーティゾン美術館（東京）でのグループ展に参加。主なコレクション：アーティゾン美術館、大原美術館、国立国際美術館（大阪）、東京国立近代美術館、長崎県美術館。

<https://miyukitsugami.jp/>



「View, 20 Pieces, 2020-21, No.02, May-Jun 2020」
2020年 キャンバスに顔料、アクリル、その他
©Miyuki Tsugami Courtesy of ANOMALY

中村弘峰 Hiromine Nakamura

1986年 福岡県生まれ。

100年以上続く人形師の家系の四代目として生まれ、東京芸術大学大学院を修了後、家業を引き継ぎながら新たな作品を発表している。従来の概念に囚われずに制作される作品は、緻密かつ斬新で、見るものの目を奪う。2023年福岡県文化賞受賞（奨励部門）、パブリックコレクションに太宰府天満宮宝物殿など。

<https://www.nakamura-ningyo.com/>



「再生の龍」
2023年 陶土、顔料

中村萌 Moe Nakamura

1988年東京生まれ。2012年に女子美術大学大学院美術研究科を修了。

楠に油絵具で彩色した作品を特徴としており、木という素材の中から、自身が求める形を探り当てるように彫り出していく。また、絵画と彫刻を横断的に取り組みながら、最近では、楠の板を使った平面作品へも精力的に取り組んでいる。国内外で継続して多くの作品を発表し、活躍の幅を広げている。近年の主な個展に「Like a Garden, Like a Home」（2023年ギャラリー椿）、「Like a Garden」（2023年銀座 蔦屋書店）、「before the dawn」（2022年銀座 蔦屋書店）、「our whereabouts - 私たちの行方 -」（2021年ポーラ ミュージアム アネックス）、「inside us」（2021年ギャラリー椿）、「GROWTH」（2020年華山1914文創産業園区）など。現在、神奈川県で10人のアーティストが入居するアトリエで制作を行う。<https://www.moe-nakamura.com/>



「sprouts of spring」
2022年 楠、油彩

流麻二果 Manika Nagare

1975年、大阪生まれ、香川育ち。

日本の色彩文化のルーツを多角的に捉えながら、独自の色彩感覚で油彩表現の幅を拡張し続け、建築空間の色彩監修をはじめさまざまなジャンルとのコラボレーションやダンスパフォーマンスなど国内外で幅広く活動している。女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻卒。2002年文化庁新進芸術家在外研修員(アメリカ)、2004年ポーラ美術振興財団在外研修員(アメリカ・トルコ)。主な展覧会に「VOCA 展」上野の森美術館（2000年・2006年）、「絵画を抱きしめて」資生堂ギャラリー（2015年）、「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.05『見えてる風景／見えない風景』」高松市美術館（2016年）「その光に色を見る Spectrum of Vivid Moments」ポーラ・ミュージアム・アネックス、高梁市成羽美術館（2022年）など。パブリックコレクションに高松市美術館、練馬区立美術館、Jordan Schnitzer Museum of Art(アメリカ)、University of Michigan Museum of Art(アメリカ)、Kocaeli University Museum (トルコ)など。<https://manikanagare.com/>



「頂より眺む The Scene I Once Saw」
2024年 油彩、キャンバス

西島雄志 Yuji Nishijima

1969年 神奈川県生まれ。1995年に東京芸術大学大学院 美術研究科彫刻専攻を修了。神話に縁の深い動物を題材に、渦状に巻いた銅線のパーツを繋げ、彫刻やインスタレーションを発表している。2021年に拠点を群馬に移し、gallery newroll を主宰。2024年にはArt Fair NAKANOJO を企画開催。主な展覧会に「瑞祥 Zui-shou -時の連なり-」(2023年 ポーラ ミュージアム アネックス)、主なグループ展に「中之条ビエンナーレ」(2011年 - 2023年 群馬)、都美セレクション展 (2021年 東京都美術館)、赤城SUNdo (2022年 群馬)、プレ BIWAKO ビエンナーレ (2022年 二条城、京都)、富士の山ビエンナーレ (2024年 静岡) などがある。

<http://yuji-nishijima.com/>



「真神 makami」
2021年 銅線

野口哲哉 Tetsuya Noguchi

1980年 香川県生まれ。2005年に広島市立大学大学院を修了。鎧と人間をテーマに、時代や文化が交雑する世界観を構築する美術家。精巧に制作された人びとの姿は、ユーモアを感じさせながらも詩情を湛える。主な展覧会に「シン・ジャパニーズ・ペインティング」(ポーラ美術館、2023年)、巡回展「THIS IS NOT A SAMURAI」(2021-2022年)、「野口哲哉展—野口哲哉の武者分類図鑑—」(2014年 練馬区立美術館、アサヒビール大山崎山荘美術館)、「医学と芸術：生命(いのち)と愛の未来を探る」(2009年 森美術館) などがある。

<https://gyokuei.tokyo/photo/album/414837>



「RING AND MAN」
2024年 ミクストメディア

ヒグチユウコ Yuko Higuchi

画家

<https://higuchiyuko.com/>



「はる」
2022年 手漉き和紙、水彩、ペン

福井利佐 Risa Fukui

1975年 静岡県出身。多摩美術大学グラフィックデザイン専攻卒業。精緻な観察による描写のきめ細やかさと大胆な構図で、観る者を圧倒させるような生命力のある線の世界を描き出す切り絵アーティスト。中島美嘉のCD ジャケットアートワーク、Reebok とのコラボレーションスニーカーやユニクロ「UT」への参加、直木賞作家の桐野夏生氏、木内昇氏の小説への挿画や装丁、NHK 太宰治短編小説集「グッド・バイ」の映像制作、NHK 「猫のしっぽカエルの手」オープニングタイトル制作などがある。お能の宝生流家元主催の「和の会」メインビジュアル担当 (2008-2018)。福音館書店かがくのとも から絵本 2019年7月号「むしたちのおとのせかい」、2022年11月号「からまつ 一ふじさんにもりをつくるきー」を刊行。現在巡回展「サンリオ展 ニッポンのカワイイ文化 60年史?」に参加。2022年 巡回展「日本の切り絵 7人のミュージズ展」参加。2024年 小学校の図工の教科書「ずがこうさく 1.2 下「みつけたよ」(開隆堂出版)登場。その他、国内外の個展や合同展の参加、ワークショップなど多方面で活躍中。 <http://risafukui.jp/>



「apple blossom」
2022年 画用紙、アクリル

増田セバスチャン Sebastian Masuda

1970年生まれ。ニューヨーク在住。

1990年代前半より演劇や現代美術に関わり、1995年に表現の場としてのショップ「6%DOKIDOKI」をオープン。一貫した独特な色彩感覚からアート、ファッション、エンターテインメントの垣根を越えて作品を制作。きゃりーぱみゅぱみゅ「PONPONPON」MV美術、KAWAII MONSTER CAFÉ プロデュースなど世界にKawaii文化が知られるきっかけを作った。世の中に存在する全ての事象をマテリアルとして創造しつづける。2017年度 文化庁文化交流使、2018年度 ニューヨーク大学客員研究員、2019年 Newsweek Japan 世界が尊敬する日本人100人。

<https://sebastianmasuda.com/>



「TRUE COLORS -home-」
2013/2024年 和紙、シーグラス、
ガラスビーズ、ガーゼ、コットン生地

水野里奈 Rina Mizuno

1989年 愛知県生まれ。

作者本人でさえ驚くような作品であれば観覧者からはもっと大きな驚き以上の何かが生まれるのではないかと期待し、「見ても見きる事の出来ない」絵画を目指している。

主な個展に「アトリエの景色」(2023年 新宿高島屋)、「Garden」(2023年 六本木ヒルズ A/D ギャラリー)、「みてもみきれない。」(2020年 ミヅアートギャラリー)、「思わず、たち止まざるをえない。」(2019年 ポーラ ミュージアム アネックス)等、主なグループ展に「異文化は共鳴するのか? 大原コレクションでひらく近代への扉」(2024年 大原美術館)、「現代美術のポジション 2021-2022」(2021-2022年 名古屋市美術館)など。愛知県芸術文化選奨・新人賞(2022)、VOCA 奨励賞(2015)などを受賞。パブリックコレクションに大原美術館、愛知県美術館、パブリックアートに三菱地所、第一生命保険株式会社などがある。 <https://www.rinamizuno.com/>



「暖かな晴天の日」
2022年 油彩、キャンバス

ミヤケマイ Mai Miyake

2008年にパリ国立高等美術大学大学院に留学。

日本古来より現代に続く独自の感性を織り込んだ作品を制作。作品は絵画のみならず、インスタレーション、半立体、プロダクト、小説まで表現領域は多岐にわたる。主な展覧会に「白粉花 Little Lily - White Lie」(2013年 POLA MUSEUM ANNEX)、「天は自らを助くるものを助ける」(2013年 箱根ポーラ美術館)「変容する家」(2018年 金沢21世紀美術館)、「BOTANICA」(2018年 釜山市立美術館)、「アート&デザインの大茶会」(2018年 OPAM)、さいたま国際芸術祭 2020「蝴蝶の夢」(2020年)、「ことばのかたち かたちのことば」(2021年 神奈川県民ホールギャラリー)、「とある術館の夏休み」(2022年 千葉市美術館)、「クロヤギ シロヤギ通信展」(2023年 MtK Contemporary Art)、「Made in Shiga」(2024年 OMOTESANDO CROSSING PARK)など。最新の作品集は「反射 yin-yang」(2022年)。京都高島屋 S.C.T8 「(THISIS) NATURE」ディレクター。ARTISTS' FAIR KYOTO コミッショナー。 <http://www.maimiyake.com/>



「跳ねる」
2022年 竹、陶、フェルト、稲穂

横溝美由紀 Miyuki Yokomizo

1968年 東京都生まれ。多摩美術大学彫刻科卒業。文化庁派遣芸術家在外研修員。

1990年代からプラスチックなど身近な素材を使い、光に満ちたミニマルなインスタレーションを国内外で発表する。近年はインスタレーションを平面に置き換えた作品とインスタレーションを組み合わせた新たな風景の創出を試みている。主な展示に「プラスチックの時代」(2000年 埼玉県立近代美術館)、「傾く小屋」(2002年 東京都現代美術館)、「盗まれた自然」(2003年 川村記念美術館)、「未来への回路—日本の新世代アーティスト」(2004-19年 国際交流基金)、「Landscape - やわらかな地平のその先に」(2021年 ポーラ ミュージアム アネックス)、「ABSTRACTION 抽象絵画の覚醒と展開 セザンヌ、フォーヴィスム、キュビズムから現代へ」(2023年 アーティゾン美術館)などがある。

<http://miyukiyokomizo.net/>



「landscape S010.006.2022」
2022年 油彩、キャンバス

Ryu Itadani

1974 年大阪生まれ

大阪からトロント、東京、ロンドンの生活を経て、現在はベルリン在住。

住んでいる街や旅先の風景、部屋にあるモノや花。

何気ない毎日で見つけた喜び、美しさを自由な線にとらえて、色彩豊かに描く。

<https://ryuitadani.com/>



「Saint-Jean-de-Luz」
2024 年 Acrylic on Canvas

渡辺おさむ Osamu Watanabe

1980 年生まれ。

工芸菓子の技法をアートに取り入れ、樹脂を用いて様々なものにお菓子のデコレーションをする現代美術作家。本物そっくりのカラフルで精巧なクリームやキャンディ、フルーツなどを用いた作品は、国内外で注目を集め話題を呼ぶ。主な展覧会に「渡辺おさむ

OHARA-DECO」(2012 年 大原美術館)。パブリックコレクションに、大原美術館、清須市はるひ美術館、高崎市美術館など。

<http://watanabeosamu.tokyo/>



「春」2022 年
モデリングペースト、アクリル絵具、樹脂、FRP